

白峰山脈縦断記

小島烏水

青空文庫

緒言

前年雨のために失敗した白峰山^{しらね}登りを、再びするために、今年（四十一年）は七月下旬高頭^{たかとう}式、田村政七^{かじかざ}氏と共に鰯^{いわし}沢^わへ入った、宿屋は粉屋であつた、夕飯の終るころ、向い合つた室から、一人の青年が入つて来た、私たちが、先刻から頻^{しきり}に白峰、白峰と話すのを聞いて、もしやそれかと思つて、宿帳で、姓名を見てそれと知つた、というので同行を申し込まれたのである、大阪高等工業学校の生徒、倉橋藤次郎氏である、一人でも同行者を増した心強さは、言うまでもない。

翌朝例の通り、人夫を僦^{やと}つて、西山峠を越えた、妙法寺の裏から、去年とは違った道——北海とも、柳川^{やかわ}通りともいうそうだ——を登った、そうしてデツチヨウの茶屋の前で、去年の登り道と一ツに合った。

このたびは霧がなかった、紫の花咲くクカイ草、蘭に似た黄色の花を垂れるミヤマオダマキが、肉皮脱落して白く立っている^{もみ}櫛^{うづむ}の木を、遠く見て、路傍にしなやかに俯向^{うつむ}いている、熊笹が路には多い。

四方の切れた谷を隔てて、近くに古生層の源氏山を見る、去年は、どうしてこの山が、気が注^つかなかつたろうと思う。

峠が上り下りして、森らしくなる、杜^{ほととぎす}鵲^すがしきりに啼く、

湯治の客が、運んだ飜こぼれ種子からであろうが、つが 樺の大木の下に、
菜の花が、いじけながらも、黄色に二株ばかり咲いていた、時は
七月末、二千米メートル突の峠、針葉樹林の蔭で！

苔一面の幹を見せて、森の樹の蔭には、蘭が生え、シシウド、
白山女郎花、おみなえし 衣笠草などが見える、しかし存外、平凡な峠だ、
樹も思ったより小さいし、谷は至って浅い、去年の霧の中に炙あぶり
出されたものは、梢一本さえ、どこに深く秘されたのだろう、夢
から醒さめたようだ、これじゃあ、森林などというほどではなかつ
た、霧の嘘つき！ と嘲った。

温泉はやはり、新湯に泊まった、去年（四十年）秋、笹子峠の
トンネルを崩壊し、石和いさわの町を白沙ちまたの巷に化して、多くの人死を

生じさせた洪水は、この山奥に入ると、いかばかりひどく荒れたかということが解る。温泉附近の路が酷くくずれている、宿の前で嗽うがいをした筈の水などは、埋没してしまっている。

例の晃平を主として、四人の猟師を雇って出発した。

早川から黒河内くろこうち、榛はんの河原、それから白剥山しらはぎと、前年の路を辿たどったときに、洪水からの荒廃は一層甚だしかった、まるで變たつている、川筋はもとより、山腹の道などは、掘ねじり切つて、棄てたように谷に落ちている、大村晃平、同富基、中村宗義などいう、土地で名うての猟師を連れたのだが、どのくらい路を損したり、無益に上下したかは解らぬ。

白剥山の入口などは、解らなくて、森の中を一行が、離れ離れ

に迷うばかり、滝^{たきの}上りまでもやった、一時は絶望に近かった、しかし山腹に辿りついてからは、去年の路が、微^{かす}かに見分けが出来た、頂は存外変りがなかった。

そうして一行は東俣谷の、オリツトの小舎^{こや}に着いた、私が恐い、怖ろしい念^{おも}いをしながらも、もう一遍後髪を引かれて見たいとおもった小舎の前の深潭^{しんたん}は、浅瀬に変わって、水の色も、いやに白っちやけてしまった。

ここを出立点として、改めて稿を次ぐ。

川楊（大井川の上流）

前夜は、東俣の谷へ下りて、去年と同じくオリツトの小舎に野宿をした。

今朝は、四時半に眼がさめる。禽とりの、朗かに囀さえずる声は、峰から峰へと火がつくようである。寝泊りした小舎の頭の、白花の咲く、ノリウツギの間からも起る。サルオガセの垂れる針葉樹の間からも、同じように起る。この声の行くところ、水と、石と、樹と、調子を合せて、谷間の客を揺り起す。間あいの岳たけ（赤石山脈）の支峰だと晃平のいう蝙蝠こうもり岳は、西の空に聳そびえて、朝起きの頭へ、ずしりと重石を压えつける。

小舎の前の溪水に嗽くちすすぐ。水は、南へと流れる。当面の小山を隔てて、向むかいは、西俣の谷になる。私たちの、これから溯さかのぼろうという、

東俣の谷と、西俣の谷とは、下流三里のところまで一つになり、初めて田代川——馬子唄で名の高い、海道一の大井川の上流——となつて、西南の方向へと、強い傾斜を走つて行くのである。

晃平は、前の川へ釣^{つり}綸^{いと}を垂れて、岩魚^{いわな}一尾を得た。これをぼつぼつ切にして、麩^ふと一緒に、味噌汁にして、朝飯を済す。それから、昼弁当の結飯^{むすび}をこしらえ、火に翳^{かざ}して、うす焦げにして置いて、小舎の傍から撈^{むし}つて来た、一柄五葉の矢車草の潤葉に一つずつ包む。何という寛濶な衣であろう、それをまた……おそらく、谷初まつて以来であろう、燃えるような、紫の風呂敷に包ませて、出かける。

谷といつても、旱^{ひでり}つづきの時は、水が涸^かれて、洲^{あらわ}が露れるし、

冬になれば、半分ほど水が落ちるというのに、今までの雨つづきで、水は、嵩^{かさ}にかかつて、蜥蜴^{とかげ}色に光りながら、迅^{はや}り切つて流れている。膚^{きめ}の細^{こま}い、黄^{きいろ}い石や、黒い石の上を^{すべ}ると、思いなしか、沈んだ、冴えた声をして、ついと通る。この谷を一回、大きい徒渉をやる、つづいて二回の小徒渉をやる。深いところは、稀に膝以上まで水が来るが、頭の平つたい、太鼓の胴のような大岩や、頭だけ、微^{かすか}に水面に露している石が、入り乱れて立ったり、座つたりしているから、大概是、石伝いで飛ばされる。そうして、水はこれらの石の間を潜り、上を這つて蜿^うねる。細い皺^{しわ}が網を打つたようにひろがる。さざ波は綱の目のように、水面に織られる。その大綱の尖端は、紐^{ひも}のように太く揺れて、アール・ヌーボー式

の図案に見るような、印象の強い輪廓を作つて、幾筋となく繋がつては、環わを作る。やがて柔らかな大曲りをして消える。痕あとを残さない、濃さと淡さの碧が、谷から舞い上る霧のほむらに、ぬらりと光る。さわると、鱗うろこでも生えていそうな水だ。いかにも足が冷たい。膝がざぶりと入った……その中に、尻まで深くなる。ここを「捩ねじれ窪くぼ」というそうだ。霧は、頻に、頭の上を飛ぶ。空気も、その重さに堪えないで、雨を、パラパラ落して来る。

次第に、谷が蹙せまつて来る、水は、大石の下に渦を巻く。深いところは紫を浅いところは藍を流している。白い沫あわが、その上を回転して、両崖の森林を振りかえりながら、何か、禍わざわいの身に迫るのを、一刻も早く遁にげたいというように、後から後から、押し合つ

て、飛んで行く。潭石の下には、おおき大きな針の如くなる魚が、全身、透き通るように、青く染つて、ぴつたりと、水底に沈んでいる。水の面には、生の動揺といつた象かたちが見えていゝる中に、これはまた青嵐も吹かば吹け、碧瑠璃あおるりのさざれ石の間に介はさまつて、黙だんまりとした死デッド・カアムネスの静肅！それでいて、眠っているのではない、どこか冴え切つて、鋭く物に迫るところがある。鰭ひれ一つ動かすときは、おそらく、水紋が一つ描かれ、水みづ楊やなぎの葉が一枚散り、谷の中には大入道のような雲がぬうつと立ち昇つて、私たちを包んで、白くしてしまふときであろう。私は、この深谷の幾千本針の針葉樹よりも、はた幾万斛ばんこくの水よりも、一寸の魚が、谷の感情を支配してはいないとは言えなかつた。

潭が深くて、渉れないから、崖に攀じ上る。矢車草、車百合、
 ドウダンなどが、柟や白樺の、疎らな木立の下に、もやもやと茂
 っている。川床に突出する森の下蔭は、湿りつ気が、最も多いか
 して、蘇苔が、奇麗に布かれている。気紛れに、そこへ根を卸し
 たような五葉松は、仰向けに川の方へ身を反らして、水と頷ずき
 合つて、何か合図をしている。崖下の黯い水も、何か喚きながら、
 高股になつて、石を跨ぎ、抜き足して駈けている。崖の端には、
 車百合の赤い花が、ひとときわ明るく目立つ。この花を、山家の少
 女の衣模様に染めたらば、などと思ひながら、森を出て、河原に
 下り、太い逞しい樹の蔭に立つた。

仰向いて見ると、その樹は、川楊である。章魚の足のような根

を、川砂の上に露していながらも、倒れずにいる。シバヤナギ、タチヤナギ、いろいろな名があろう、幹の皮は、皺だらけで、永年洗い落したことの無い垢……青苔が、厚くこびり粘^っいている。夜になると、この筋の根に、一本一本神経が入って大手を振って、のさり、のさり、谷の中を歩きそうだ。川に沿^っいて、両側に森がある。森には、樅^{もみ}や樺の類が茂っている。しかし、川の中まで足を踏み入れて、人間を嗅ぎ出して、突き倒し兼ねないのは、この川楊ばかりだ。何となく、いやな樹だ。

谷のことだから、水を横に切っては、右側へ移ったり、左側へ寄ったりする、私の前には、獵師が、鍋や米袋をしよって行く。腰に括^{くく}つてある紫の風呂敷が、揺れると、強烈な色彩の波^{バイブレーション}

動^{ヨン}が、流水の震動と一つになって、寂しい谷が、ぱっとなる。
と、眼の前に、ふわりと、雪の粉が落ちる……七月末の炎天である……直ぐ、水に吸い込まれて消える……また、頬を掠^{かす}めて、ふわりと飛ぶ。信濃の浅間山、飛驒の硫黄岳、遠くの火山から、吹きなぐれた灰でもあろうか……空は曇り切つて、どんよりと、眠むような顔をしている。何だろう、今のはと、眼と眼を見合せる。
鵲^{せきれい}鴿^いが、もの忘れから気が注^ついたといった風に、石の上から、ついと飛ぶ。

ふと、頭の上を見ると、谷に冠さるやうにのさばって、古い、大きな、先刻のと同類の楊の梢が一本ぶらりと垂れている。その梢に、一面のほうけた絮^{わた}が、風もないのに、氷でも解けるやうに、

はらり、はらりと、落ち散るのであった。

その後、春になって、街道に青く角芽^{つのめ}ぐむ柳の糸を見るたびに、大井川上流の深谷に秘められて、黙々と、皺だらけな、深刻な顔を、水に覗かせている老楊が……ああ、今もなお、鮮やかに眼に。

前夜の小舎から半里ばかりの間は、水もかなり深くて色も鮮やかである。水成岩の峡間を流れるだけあって、どこか、赤石山下の、小渋川に似ている。小渋川よりも、川幅が狭くて、谷地が、かえって濶^{ひろ}いだけに、徒渉の回数は少い、深山の溪流としては、先ず安楽な方で、小渋川や、槍ヶ岳の蒲田^{がまた}谷などとは、深さと、急と、嶮^{けわ}しさにおいて、到底、比べられない。

なお半里も来て、下水瀬しもひせというところになると、枯木と、石の欠片の沙漠地で、水は、細く、片寄せられて、流れている。川は、やがて、左に折れて、農鳥山支脈の峽間に入つて、益ますす狭く、石が次第に多い。うしろを振りかえると、そそり立つ山——森林で埋まる山にふさがれて、川は、全く、両山迫れる間の、凹流になつてしまふ。蝙蝠岳から来る瀬ひせが一筋、ここで合う。これを上氷かみ瀬ひせという、バロメートルを見ると、実に海拔二千三百米突メートル、あまり高過ぎるから多分狂つていたのであらう。

深潭が、また一つある。川は、底を傾けて、水を震うので、森の中まで、吹雨しふきが迷い込んで、満山の樹梢うらおを湿す。白樺や五葉松は、制裁もなければ、保護もなく、永えに静粛に、そして嚴格に、

造化の大法を、寸分容赦なく行つてゆくように、この自然の王国から、定まれる寿命を召されて、根こそぎに、谷の中にたわいなく倒れている。床しょうぎ几代りにまた腰をかけて、少し休む。河原の砂に、点々として、爪痕のあるのは、水を飲みに下りた、鹿の足痕である、獵師という。同行の高頭君は、退屈紛れに、杖を沙ふる上に揮つて、それを模写していた。自然は欺かれず、人間の智能は、鹿の足痕一つをだに描き得なかつた。

昨夜は、この旅行で、初めての野宿で、睡眠不足であつたためか、私は眠くなつた。風は峡間にどこからともなく漲みなぎつて来て、樹々の葉は、婆娑婆娑ばさばさと衣摺きぬずれのような音を立てる。峡谷の水分を含んだ冷たい吐息が、頬ほおや腮あごにかかる。川の水が子守歌のよう

に、高くなり、低くなって、私たちの足音を消して、後から追い冠せて来るときには、一行はまた、森の中の人となっていた。森の中には款冬ふきの潤葉が傘のように高い。ドウダンツツジの葉と、背向きになって、翠あおい地紙に、赭あかつちやけた斑ふが交ったようだ、何枚も、何枚も、描き捨てられた反古ほごのような落葉が、下に腐つて、半ば黒土に化けている。

また河原へ出た。もう時刻だから、紫の風呂敷を開ける。矢車草の葉包が釈とかれて、昼のものが腹に入った。空は、もう泣き出しそうになって、日の眼を見ないから、手が凍こごえる。焚火たきびに暖まっていると、きようは、七月の二十三日だのに、という声が、一行の中から洩れた。

それから、幾度も川の水を避けて、森に入ったり、河床へ下りたりする。森の枯木は、白く尖つて、路を塞いでいるので、獵師は、先登に立つて、鉋で切つ払う。太い、逞ましい喬木でも、心が朽ちているから、うっかり掟ると枝が折れて、コイワカガミや、ミヤマカタバミの草の褥へ俯つたりする。また、幹には苔が蒸して、皮は土より柔く、ぼろぼろに腐っているから、生あるものの肌のように、ぬらりと滑り、ぐちやりと触れて、いやな氣持がする。

谷は、益す^{ます}迫つて来る。手を伸し合う針葉樹は、格子縞^{こうしじま}を、虚空に組み合せている。その間を潜つて、霧の波が、さつと寄せると、百年の古樹は、胴から上を、蝕ばまれるように、姿を持つ

て行かれる。樹の下は、皆石である。石の上に、根を托さぬ樹は少い。その石も、樹も、皆、水の威力に牽引されているようにで、ひろびろ潤々とした河原に、一筋水が走っている。この水のみが、活物の緑をひそ潜めているかと思われる。およそ、山の中の氷の下から、数珠を手繰たぐるように落ちて来る、峽間の水ほど力の強い、自由の手も少いであろう。そうして、未だ、深秘の故郷にいるかのよう
に、足踏して跳おどり狂っている。根曲り竹も、楊の根も、樅の肌も、はた長くしな垂だれるサルオガセも、その柔じゆうなん嫩の手に、一旦は、撫でられぬものはない。華麗と歓楽とを夢みるように、この雪白く、氷堅き北方の閉鎖から解かれて、南方の奢侈しゃしを、立ち姿や、寢像にまで現して、昼となく、夜となく、おそらく、千年も万年

も、不斷の進みをつづけているのだ。ああ、本洲の比類のない水成岩山、その高きこと、一万尺、古生層地の峽間を流れる水！

この氷の解放に伴って、いくばくの犠牲を、要求されているかは、河原の荒涼肅殺を見たまえ。^{しょう}性なきまでに白げられたる、木の骨

——というより外に、与える名がない——と、砂に埋まれた楢円石や、稜角の鋭いヒイラギ石やは、丁度、人間の屍骸が、木乃伊^{ミイラ}となつて、木偶^{でく}か陶製の人物か、区別が見えないと同じように、原性を失つて、唯一自然の平等相に復歸している。そのいたましい最後の均一！

私たちは、互に、言語もなく、眼と眼とを見合せて、すさまじい荒廢の姿に顫^{ふる}えた。

もりやさわ
森谷沢

という一筋の小川が、左から流れて、落ちるところあ

たりから、谷というよりも、沢の方へ近くなり、両側の山の頭が
低くなつて、天が俄に高くなつた。これらの山を踏まえて、のうと農

鳥り山の支峰、

白河内岳しろこうちが、

頭を出す。名にし負う白峰、

赤石、

両大山脈が、東西に翼をひろげて、長大の壁をたてめぐらし、互
に咫尺しせきする間に、溝のように凹まつた峡谷は、重々しい鉛色の空
であるから、まだ一時半というのに、黄昏のように、うす暗い。

前夜の小舎よりは、二里の余も来たろう。

とうとう大雨が降つて来た。私たちは、森の下蔭に身を潜めて、
小止みを待っている。雨嫌いな私は、かじかざわ鰍沢で、万一の用心に

と、買つて置いた饅頭笠を冠り、紐ひもの結び方で苦心をしているうちに、意地の悪い雨は、ひとまず切り上げてしまつて、下界を覗く空の瞳ひとみがいまいましいまでに冷たい。また、二回の徒渉をして、ひろこうち
広河内へと達した。

私は、このような狭苦しい谷の中で、このような広濶な地を見られようとは思わなかつた。広河内のあるところは、東俣の谷の奥の、殆んど行き止りで、白峰山脈と、赤石山脈の間が、蹙せまつて並行する間の、小さい盆地べースンである。丁度、白峰山脈からいえば、農鳥山の支峰の下で、河原から、赤石山脈の間の岳あいとは、真面まともに向き合っている。両山脈の相對する間隔は、直径約一里もあろうか、間の岳の頂までは、この河原から一里半で達せられる。岳の

裾から河原へは、灰色の沙が、幾町の長さの大崩れに押し出して
いる。全く洪水よりも怖い沙の汎濫である。絶頂から山越しに
向へ一里半も下りると、中股というへ出られる。なお一里で、小
西股の材木小舎に出て、そこから八里ばかりで、この旅行の発足
点とした、湯島温泉へ下られるということであつたから、もし天
候が嶮悪で、白峰山脈縦断が、覚束おぼつかなかつたら、その路を取つ
て、引き返すはずにして、きようは天候も悪いし、これから農鳥
山に登る間に、適當の露宿地がないというので、まだ早いが一泊
することにした。狛師は楓の細木を伐りき朴たおし、枝葉を払わないま
まで、柱を立て、私たちの用意して来た、二畳敷ほどな油紙二枚
を、人字形に懸けて、家根を作る。それから、樅や、栂の小枝を、

鉤なたで、さくりさくり伐り落して、鮮やかな、光沢のある、脂の香気が、鋭敏に鼻感を刺戟する、青葉の床を延べる。ふつくりと柔く、尻の落ちつきがいい。同行八人の寝室も、食堂も、ここで兼ねるのである。早速、焚火にかかつて、徒渉に濡れた脚絆きやはんを乾すやら、大鍋を吊つるして湯を沸かしたりする。

広河内の土地のありさまは、中央日本アルプスの聖境、上高地の中、島々しましま方面から徳本峠とくほんとうを下り切った地点に、よく似ている。大沢が、濶く、峽間に延びて、峽流の分岐したのが、幾筋となく蜿蜒うづまり、枯木が、踏み碎かれた、肋骨のようになって、何本も仆れている。水に漂流したまま、置いて行かれたのであろう。そうして、山榛やまはんの木、沢胡桃さわくるみなどが、悄しやうぜん然と、荒れ沢の

中に散在している。梣、樅、唐櫨^{とうひ}、白樺などは、山の岨^{がけ}に多く、水辺には、川楊や、土俗、水ドロの木などが、疎^{まばら}に、翠の髪^{くしげず}を梳^かっている。七月の炎天も、この谷間までは迫つて来ないと見えて、白剥山を一つ超えて、東俣の谷へ来ると、未だ若葉、青葉の新緑が、生々しかつたが、ここまで溯ると、潤葉、細葉は、透明を含んだ、黄の克^かつた、明るみのある嫩^{わか}い緑で、霧の雫^{しずく}にプラチナのように光った裏葉を翻えしている。峰には未だ、残^{のこん}の雪がかつきりと、白く浮き上つて見えるほどである。一体に、谷は、四月の末か、五月頃の柔々しい呼吸で充ちていて、大きな声を出すのすら、いたいたいようだ。しかし、駒鳥^{こり}の錘^{もり}を投げるような鋭い声は、沈滞がちな、中層の空気を引っ掻き廻している。

飯の準備をしているうちに、驟^{しゅう}雨が一としきりあつて、雷鳴が近くに聞えたが、夜に入つて、星が瞬いた……かと思うと、淡い、軽い霧が、銀河のように空に懸る。焚火の烟は、油紙の屋根の継ぎ目から洩れて、白い柱が立つては崩れ、風に折れて地を這^はいながら、谷中を転げてゆく。火が、ぴしぴし、音を立てて、盛に燃え出すと、樺の立木の葉が、鮮やかに、油紙の屋根に印して、劃然とした印画が炙^{あぶ}り出される。晃平が、先刻、未だ日の暮れないうち、朝飯の菜にとて、山款^{やまふき}数十莖を折つて来たのを、みんなして、退屈^し凌ぎに、繊維^{すじ}を抜いては、鍋へ投げ入れる。世間話^{せけんわ}がはずむ……夜半になると、焚火は、とろとろと消えかかる。寒気の強いのと、明日の天候が気になるので、眼がよく覚める。

露营地の外では、細長い爬行動物——この谷の主——東俣の川——が、蜿蜒^うりながら太古の森林の、腐れ香に噎^{むせ}んで、どこまで這って行くことであろう。

白花石楠花と高根薔薇（白峰山脈の一角に立つ記）

ゆうべは、まんじりとしなかった、油紙の天井を洩れる空に、星が閃^{ひら}めいていれば、明日の好霽^{こうせい}を卜^{ぼく}されるので、仰^{おが}むようにして悦ぶ、その次に覗^{のぞ}くと、星どころではない、漆黒の空である、人の心も泣き出しそうになる、しかし暁天までには、焚火のとりとろ火に伴^つれて、穴へでも落ちたようにグツスリと寝込んでしま

った、眼が覚めると鳥の声がする、谷間に「ひんから」「ひんから」と響きわたる、それが年久しく谷川の底に沈んでいる、透き通った、白い冷たい、磁器の魂が啼くのもあるようだ。

起きて見ると、霧が^{まろ}団くなり、筋になり、樹の間から立つ、森からも、谷底からも、ふわりと昇る、例の山^{やま}款冬^{ふき}の茎を、醤油と鰹節とで煮しめて、菜^{さい}にする、苦味のない款冬である、それから昨夕の残飯に、味噌を^{むすび}ブチ込んで「おじや」を^{こしら}拵えて^{すす}啜る、昼飯の結飯は、焚火にあてて山牛蒡^{やまごぼう}の潤葉で包む、晃平の言うところによると、西山の村では、この牛蒡の葉を、餅や団子に^こ捏ね入れて、草餅を作るそうだ、蓬^{よもぎ}のように色が好くはないが、味は宜^よいと。

一夜作りの屋根——樅の青枝を解き施^{ほぐ}して、焚火に燻^くゆらしてしまふ、どんなに山が荒れても、この谷底まで退かない決心である、脂の臭いのする烟は、シユウシユウと呻^{うな}りながら霧に交わつて颺^{あが}つてゆく。

川に沿いて、一、二丁も溯り、正東^{まひがし}の沢へと入る、石の谷というよりも、不規則に、石を積み累ねた階^{かさ}段^{ステージ}である、石からは水が声を立てて落ちている、石の窪みには澄んだ水が湛^{たた}えている、その上に、櫓の葉が一枚、引き^{ちぎ}つて捨てた紙片のように、浮いている、自然という無尽蔵は、何物をも、こうして惜しげなく、捨てるのだ、これからの深林もそれだ。

石の谷の中途から、路を奪つて針葉樹林に入る、唐檜や樺やの

純林である、樹は大きくはないが、ひよろひよる痩せて丈が高い、
そうして油気の失せた老人のように、はしゃいだ膚をして、立っ
ている、十五、六年前に、一度伐採したことがあるのだそうで、
その痕跡の仆木が、縦横に算を乱している、そうして腐った木に、
羊齒しだだの、蘇苔が生ぬるく粘こびついて、唐草模様の厚い毛氈もうせんを、
円く被かぶせてある、踏む足はふつくらとして、踵が柔かく吸い込ま
れる、上へ上へと高くなるのであるが、段々暗い地の底へ吸い込
まれるようだ。

向つて蝙蝠こうもり岳の残雪が、銀光りに輝いて、その傍に三角測量
標が、空を突いて立っている、間の岳あいだけ（赤石山脈）は森に隠れて
見えない、冷い風が、暗い穴からでも来るように、ひいやりと吹

く、鳥はひんから、ひんからと、朗らかに囀ずる、登るに随つて、蝙蝠岳はほぼ正西に、^{まにし}間の岳は北西に、いずれも残雪白く、光輝を帯ぶ。

稀に痩せた白樺が交つて来た、傾斜は二十五度位であろう、幸いなことには、岩が少なく、黒く滑らかな土ばかりだから、足の躓くおそれがない、^{つまず}白檜も現われて来た、^{しらべ}痩せ細つて、痛々しい、どこを見ても、しツとりした、濡れたような、温味がない、日は天に^{ちゆう}沖して、頭の直上に来ているが、深林のために強烈な光線が、梢に遮られ、反抗されて、土まで落ちて来ない、峡谷の底は見えないが、サルオガセを長く垂らした針葉樹が、梢と梢とを抱き合い、すくすく躍つて、^{おど}私たちに向つて来る、その茂りの下

から、水の声が、ザーツと、雨でも流すように、峰を伝わって追いかけて来る、間の岳と蝙蝠岳とは、いつしか峰つづきになって、蝙蝠岳の残雪は、下で仰いだような、一条や二条ではない、数斑の白が、結晶したように劃然と碧空を抜き、鮮やかに、眉に迫つて来る。

今朝の小舎からは、もう一里余も来たであろう、深林の中に踏み均^ならした小径がある、晃平は「こりや鹿の路だあ」と言つて、目もくれずに先へ立つて登る、禿木^{はげき}の枯れ切った残骸が、蒼玄^{あおくろ}い針葉樹林の間に、ほの白く見える、死んでも往生が出来ないという立ち姿だ、霧がフーツと襲つて来て、樹々の間を二めぐり三巡^めぐりして、白檜の梢に、分れ岐^{わか}れになり、ひそひそと囁^{ささや}き合い

ながら、こつちを振り返つて、消えてしまふ、間の岳と蝙蝠岳の峰々の繋がりには、偃松はいまつであろう、黯緑あんりよくの植物で、繡ぬつてあつて、所々に白雪の団々が見える、この赤石山脈の大嶺は、始終私たちを瞰下みおろして、方幾里の空中を、支配する怖ろしい王さまでもあるように、蜿蜒と深谷を屏風立に截たち切っている、そうして肩から雲を吐く、雲は梢に支えられて、離れ離れではあるが、私たちの頭へと、徐ろおもむに集まつて来るらしい、鳥はひんから、ひんからと啼く。

傾斜が次第に急になる、白檜も段々小さくなる、谷々の風が吹き荒すさんで、土をくずし、樹を吹き折り、上から押し流すので、傾斜がなお急になるのであろう、また一筋の路が深林の中を横ぎつ

ている、何でも奈良田ならだの人が、材木を盗伐するために、拓いたの
で、この道は広河内ひろこうちから一里半の上、池の沢というところから
初まつて、奈良田から四里もあるという、白河内しろこうちの谷まで切つ
てあると、晃平は語った、唐檜の伐り痕の、比較的新しいのは、
それかも知れない、彼らは盗伐して、板に挽ひいて、曲げ物のよう
に組んで、里へ出すのである、林務官などが殺されたりするのも、
こういう路で、不意に盗伐者に邂逅かいこうするときである、野獣のよ
うな盗伐者は、思慮分別もなく、牙きばを咬かんで躍りかかり、惨殺し
て後を晦くらましてしまうのである。

白檜の丈も、四、五尺になつた、山の頂は直ぐ額の上にあるか
して、水分を含んだ冷たい空が、俄にひろくなる、樹影に白い花

が、チラリと見えた、誰が叫ぶとなく、石楠花しやくなげ石楠花という声
 が伝わった、そりやもう登マウンティニア山家マウンティニアでなくては、想像の出来な
 い、世間も、人間も忘却した、心底からこみ上げて来る嬉しい声
 が、この一株を繞めぐつて起った、白峰の雪は白い、その雪解の水
 を吸って育った、石楠花の白花は、天風に芳香を散じて、深林の
 中に孤座している、西の国のアルプスの人たちが、石楠花を高アルペ
 山ン・ローズ薔薇と呼ぶのも無理はない、私は何よりも懐かしい石楠花
 に、そつと接吻した、足許を見ると、黄スミレも咲いている、偃
 松が始めて見えた、久しぶりの知音が、踵きびすを接して、ドヤドヤと
 霧の扉を開けて、顔を出して、手招きをしている。

偃松は、もう白檜帯と、一線を劃かぎった、その境目から下は灰色

で、上は黯緑だ、黯縁の偃松は、山の峰へ峰へと、岩石を乗り越え、岩壁の筋目へと喰い入り、剃刀のような脊^{せきり}梁^{よう}を這つて、天の一方へと、峰のそそり立つところまで、這い上っている、偃松の中には、風で種子を飛ばされたと見える白檜が、一、二本、継子扱いをされたように、悄然とサルオガセを垂れながら、白く骨立っている、弱きものにも寄生する更に弱きものがある、顧れば白檜帯は、脚下に圧しつけられ、背丈を揃えた庭の短木のよう^{まも}に、いじけて、それでも森厳として、太古ながらの座席を衛^{まも}つている、そして片唾^{かたず}を飲んだように、静まり返っている。

虚空の領分へ、人間が入ったときには、霧の使者が、先ず出迎えに来る、——先刻^{ささや}呟^{ささや}き合つた、それだ、小雨のそば降るように

来た、一行の中には偃松を見て、引き返すような男はいない、し
 かし素と素と、路でないところへ割り込んで来たのである、白檜
 の林はともあれ、偃松の犇々ひしひしと隙間のない海原へ入っては、往
 くことも戻ることも出来ない、晃平は、鉈なたで偃松を切ッ払い、切
 り落とし、辛うじて路を作った、私は先登になった、偃松の大波に
 揺り上げられながら、岩のあるところを目懸けて、縋すがりつく、倉
 橋君も、それから少し後れて、高頭君と中村君とが、みんなこの
 蒼あおぐろ玄い波に、沈没したり、浮き上ったりして、つづいて泳いで
 来た、敢えて泳ぐという、足が土に着かないからだ。

岩の上には、浦島ツツジ、ツガサクラ、コケモモなどが、平ツ
 たくしがみついている、私は岩角に身を倚よせて、眼下遥かに低い

谷底を見た、雲と霧と入り乱れて、フツ、フツと山上目がけて来る、その裂け目から谷を隔てて赤石山脈の大嶺、その間に、また谷を隔てて早川の連嶺が、幾析となく重なって、不安な光輝を放っている。

幾重の雲の中から、名の知れない山の顔が……肩から肩へと、腮あごを載せて、私を冷やかに見ている。

もう遁にがすことではないぞよ。

耳許で嘲笑あざわらいされたり、私語ささやかれるような気がする。

私は先んじて上った、幸いに偃松が薄くなった、それを破つて、岩石が醜しゅうかい恠かいの面を擡もたげている、その岩石のつづく先は、霧で解らない、私は岩伝いに殆んど直線にグングン這い上った、霧は

もう深林の中でのように、キュツというような、柔^やさしい呟^{うな}き方ではない、ヒューと呻^{うな}つて、耳朵^{かみみ}を掠^{かす}めて行くのだ、無論荒ツぽい風に伴^{ともな}つて来るのである、私はその風を避^よけて面^{おもて}を伏^ふせようと
して、岩の罅^{ひま}け目に、高^{アルペン・ローズ}根^{アルペン・ローズ}薔^{ローズ}薇^{ローズ}が、紅^さを潮^さして咲^さいているの
を発^は見^みした、匂^{にお}いがいかにも高^{たか}い、私はこのときほど、高山植物
の神秘^{しんぴ}に打^うたれたことはない、白花^{はくわ}の石楠^{せきなん}花^{はな}は、潔^{けつ}いけれど、血
の氣^きの失^うせた老嬢^{らうじやう}のように、どこか冷^{ひや}たかつた、今^{いま}一^{ひと}と目^め、この
花^{はな}を見ると、もう堪^{かた}まらなくなつて、凍^こえても私は、この高根薔
薇^{げい}を胸^{むね}に抱^{かか}いて死^しにたいと思^{おも}つた、高山植物^{こうしやんぶつ}というものを、殆^{たいてい}ん
ど摘^とみ取^とつたことのない私も、このときばかりは、——白峰^{しらね}赤^{あかい}
石^し、峰^{みね}々に住^すませたまう荒神^{あらがみ}たちも許^{ゆる}させたまえ——一輪^{いちりん}を衣^{ほろ}

ケット

裏へと秘めた、そのときは霧中の彷徨^{ほうこう}で、考える余裕もな

かったことだが、文芸復興期^{ルネッサンス}以後、伊太利唯一の天才と呼ばれた

山岳画家ジョヴァンニ・セガンチーニが、夏の初めアルプス山の

雪中で、苔^{つば}める薔薇を発見して「薔薇^{エ・ローズ・リーフ}の葉」という名画を描

いた、それは白い床の雪の中から髪の毛の柔かい、薔薇色の頬の

愛らしい乙女が、顔を出して、涼しい眼をバツチリと瞬いている、

背景は未だ寂寥な眠から醒^さめない、暗^{やみ}の空に、復活の十字架が、

遠くに小さく見える、象徴の匂いの饒^{ゆた}かな作品である、あの高根

薔薇は、私には永久に忘られない花の一ツである。

やっとこの山での最高点——と思う、霧で遠くの先は解らない

——へ着いた、何だかこう俄に広い街道へでも出たような気がし

た、霧はフィューと虚空を截^きって、岩石に突き当って、水沫を烈しく飛ばす、この水球^{みずたま}はこの谷から登って、どこの谷へ落ちるのか解らない、雷鳥だか山鳩だか、赤児のような啼声が、遠くなり、近くなつて、偃松の原から起る、冥府の奥の、奥の方から、呼ぶようで、気が遠くなる、未だ後の人たちが来ないので、私は岩角に尻を据えて、黙って霧の中に座っていた、霧は鋭敏なる神経を有する触角のように、尖端を三角形にして、ヒューと襲つて来る、霧ではない、もう雨だ、岩も偃松も、寂寞そのものの、しわがれ声を挙げる、私は孤独だ、天もなく、地もなく、ただ幾団が幾団に、絶えず接触して、吹き荒るる風と霧があるのみだ、宇宙におよそ蕭殺の声といったら、高原の秋の風でもなければ、工

場の烟突の悲鳴でもない、高山の霧の声である。

その中に倉橋君が来る、晃平をしんがり殿として、一行が揃う、こう霧がひどくては、方角も何も解らない、晃平は荷を卸して、路を搜索に出たが、無益に戻つて来た、岩の間を点接して、トウヤクリンドウ、ミヤマキンバイ、ミヤマウスユキソウ、チングルマなどがあつたが、風と霧と雨の中で、一々眼に止めていられない。

それでも石の河原のような小隆起を、二タ山ほど盲越えに越えた、高頭君はウラジロキンバイが多いと、指して驚いている、この高山植物は、白馬岳や八ヶ岳に産したものだ、今濫採されて、稀少になったものだそうで、今のところ、ここが最もほうじょう豊饒な産地であろうと語られた。

未だ時間はあるが、もうこの天候では泊まるより外はないことになった、路側の窪んだところに、猟師でも焚火したと見え、偃松の櫓が、半分焦げて捨ててあつた、その近傍の窪地を選んで、偃松と偃松との間に、油紙を掛け渡し、夜営地を張り、即刻焚火をした、手でも、足でも、寒気に凍えて、殆んど血が通つてるとは思われない、晃平たち案内者は、さすがに甲斐甲斐しい、蓆に雪をどっさり包んで、担い梯子でしよつて来て、それから薬罐やかんの中で、湯を作る、茶を煮る、汁粉を作る、雪の臭いを消してうまかつた、晃平は雨の小止みを待つて、雷鳥を銃殺して、羽毛を撈むしつて、肉を料理する。

油紙の天幕の中に、私たちの金剛杖を、三本組み合せ、それへ

縄を下げて、鍋を吊り、偃松の枝や根を薪材にして、煮炊にたきをするのだ、山頂の風雨とはいいながら、焚火さえあれば、先ず生命に別条がないということを知っているから、連中懸命になつて、薪材を山のように搬はこんで、火のそばへ盛り上げたものだ、それでも凍えてはならないと、有りつたけの衣類を出して衣きた、困つたことには雷鳴がいかに強い、頭上五、六尺のところを、転がつて行くようで、神経がピリピリするから、鉈でも、眼鏡でも、鉄かなも物は、凡すべて包むことにした、雨は小止みになったり、また大降りになったりする、大降りのときは、油紙の天幕の中央が、天水桶のように深くなつて、U字形に雨水の重味で垂れ下る、今にも底を突き抜きそうであるから、連中底の下から手で押し上げる

と、雨水は四隅から迸^{ほとばし}つて、寝ているところへ流れ込む、空鍋を宛てがって承^うけたり、茶碗で汲みこぼしたり、騒ぎが大きい。

面白そうに笑って作業をしながらも、天外の漂流者という孤独の感が胸に迫る。

鼠色の印象（暴風雨前の富士山及び白峰山脈）

汽車の中は、蒸されるように混んだ、肘^{ひじ}と肘と触れ、背と背と合された人々が、駅ごとに二、三人ずつ減る、はてはバラバラになつて、最後の停車場^{ステーション}から、大きな、粗い圈^わを地平線に描いて散った、そうして思い思いの方向へと往^いった。

鳶^{とび}のように、虚空へ分け入ったのは、私たちである、あれから五夜で、私たちは海拔八千尺ほどの、甲州アルプスへ来た、山の上には多年雪に氷に磨り減らされて、鑢^{やすり}のように尖った岩が、岩とつづいて稜角^{リッジ}がプラットホームのように長い、甲府平原から仰いだ、硬い角度の、空^{スカイライン}線の、どれかの端を辿^{たど}っているのだ、何万という、下で寄り集まった眼球がみんな私たちを仰向いているような気がする、その稜角の窪んだ穴の中に、頭を駢^{なら}べて、横になったのが、私たち四人——人夫を合せて八人——偃^{はいまつ}松の楯^ほ火^{だび}に寒さを凌いで寝た。

霧が夜徹^{よどお}し深かった、焚火の光を怪しんで、夜中に兎^{うか}が窺^{かが}い寄ったと、猟師は言ったが、私は寝ていて知らなかった、草鞋^{わらじ}も解

かないで、両足をとろとろ火に突つ込んで、寝ていたとき、小坊主がちよこちよこと歩んで来て、人の寝息を窺ったのを、ほの微かに知っている、眼を覚ますと、スーッと白い霧の中へと飛んで、羽ばたきの影が、焚火に映ったようだ。

寒いので仲間が、入れ代りに眼をさます。獵師は、やけぼく焼木杭に
キセル烟管をコツコツ叩きながら、

今がた雷鳥が何羽も出来やした。
 と話す。

霧はフツ、フツと渦巻く、偃松に白く絡んで、火事場の烟でも立つように、そら虚空を迷っている、テント天幕の屋根の筋目から仰ぐと、暗灰色の虚空が壁のように狭くなって、鼻の先に突つ立っている、

雨と知りながらも、手を天幕の外へ出すと、壁から浸染^{にじ}み出る小雨に、五本の指が冷やりとする、眼がやつと醒^さめる。

ゆうべは月がちよつと冴えたのに……雨かなあ。

と仲間の一人が欠伸^{あくび}をして言う。

そのときは、富士山が、怖ろしく大きく見えたが、見ているうちに、細くなつて蒼^{つぼ}んでしまった。

……いやな、霧だなあ。

と、私は嘆息する、天地の間には、風が吹くのでなければ、霧が流れるのだ、そのたびに、天幕の中へ、ザアと小粒の雨がそそぎ入る、柱代りの金剛杖が、キュツと呻る、杭に纏^もわられた小舟が、洪水に翻弄されるように、油紙の屋根が、ペラペラ動く。

何時だか、時計を出すのも臆^{おつくう}劫だ、朝だか夜中だか解らない。
尻に敷いた褥^{しとね}は、可愛らしい高山植物で、チングルマの小さい
白花、アカノツカサクラの赤い花などが、絨氈の斑紋になつて、
浮き上る、焚火の影に、鮮やかな織目を見せる。

早く日の目が見たい。

早く穴の中から這い出したい。

同じ思いが、仲間の顔色に読まれる、飯を炊くのに、未だ時間
がある、思い切つて天幕から一、二間歩き出した、岩を二ツ三ツ
飛び越えて、次第に爪先が上る、無辺無限の単^{モノトニイ}調の線が、ど
こへ繋^{つな}がつて、どこへ懸っているのか、解らない……やはりあの
空線の一つを辿っている。

天幕が霧の中に、小さくぼんやり見える、四ツ柱に、油紙がぺらぺらとして、田舎の卵塔場らんとうばのようだ、今まで、あそこに寝ていたのか知ら……この霧と雨の中を、たった紙一枚の下に……火光がパツとさす、霧の水球みずたまが、美しい紫陽花色あじさいに輝いたかともうと、消えた。

稜角の端まで這い出して、小さい阜おか——古代の動物の骨のようにゴロゴロ転がっている石の堆積——の上に立った、石はビツシヨリと濡れて、草鞋が沁る。

朝明りか知らん大きな水平のひろごりが、足許に延されている、白い柔毛にこげのような雲が、波の連続するように——したが一つの波も動くとは見えない——凸凹たかひくを作つて、変化のある海が、水平

線の無限に入っている、しかし正面は、霧が斜に脈を引いて、切れそうにもない、その間から彎弓ひきゆみのような線が、幾筋となく泳いで出た、ハッキリすると土堤ほどの大きさになった、山である、関東山脈の一端と、早川連嶺の一角とだけが、おぼろに見えたのである、山と山との間は、みんな空席で、濃厚な水蒸気が、その間に屯ろしている、山という山の各自は、厳しく守られている、生物は守られていない。

雲は凍っているのか、吐息を凝らしているのか、巨大の容積がしずまり返っている。

その深さが何万尺あるか測られない、この中に何か潜在ポテンシアル力的力的な、巨大な物が潜んでいる、そうして生物を圧迫する——化性けしょう

の蝙蝠^{かわほり}でも舞い出そうだ。

あの底には、もしくは外には、都会がある、群集がある、燈^{ともし}火^び、音曲、寄席、芝居がある、群集と喧噪の圧迫から遁^にげて、天涯の一角に立ったときに、孤独と静肅の圧迫！

少し明る味がさした、明る味のさした方角を東に定めている、その東の空が、横さまに白く透いた、奥の奥の空である、渋^{しぶ}昏^{ぐら}く濁った雲の海^{プレーン}の面が、動揺混乱するけはいが見える。

外套をふわりと脱いだように、眼の前の霧の大かたまりが、音もなく裂けて、谷へ落ちた。

富士山が、すつきりと立った。

名も歴史もない甲州アルプスに、対面して、零^{れい}落^{らく}の壮大、そ

のものが、この万年の墳墓を中心にして今虚空を奔^{はし}る。

空々寂々の境で、山という山の気分が、富士山に向いて、集中して来る、谷から幾筋とない雲が、藍の腐ったような塊になって、立ち昇る、富士山はこの雲と重なって、心もち西へ西へと延びて来るようだ、蝕^{むしく}った雲の淵の深さが、何十尺かの穴となつて、口が明く。

頭がようやく冴えて来た、足許の岩では、偃松が近くは緑に、遠くは黯^{くら}くなつて、蜿^うねっている、天外絶域の、荒れはてた瘠^{やせつ}土^ちにまで、漂つて来た、緑の垂直的終点を、私は今踏んでいるのだ。

空の気味の悪いほど、奥まで隙^すいて光っているだけに、富士山

は繻子しゆすでも衣きたように、厚ぼったくふやけている、いつもの、洗われたように淨い姿ではない、重々しい、鼠ツぽい色といったらない。

いつの間にか、仲間が一人来る、二人蹠ついて来る、岩の上には、黒いピリオドが、一点、二点、三点——視線は一樣に、鼠色のそれに向う。

富士かね。

富士だよ。

あの山は眠ったことがないから、醒めたこともないというよう
な、澄した顔つきをしている、私たちとの距離は、いよいよ遠く
なった、その間を煙のように、眼先を霧が立って、右へ往きそう

になったり、左へ思い出して、転がったりしている。

厚味の雲の奥で、日が茜あかねさしたのか、東の空が一面に古代紫のように燻くすんだ色になった……富士の鼠色は爛ただれた……淡赭色の光輝を帯びたが、ほんの瞬く間でもとの沈鬱に返って、ひっそりと静まった。

フツ、フツと、柔くて、しかも鋭敏な音を立てて霧——雨が来た、偃松も、岩も、山も、片ツ端から白い紙になって、虚空に舞い上る。

富士も一息に吹き消された、土地という最大多数から、少量をつまんで、年代また年代と、築き上げて作製した、百万年の壁画が、落ちた。

寂しきは、人の心の空虚を占領した。

鼠色の凶兆しらせはあつた、それから間もなく、疾風豪雨になって、

一行は、九死一生の惨めみじな目に遇あわされた。

石・苔・偃松（白河内岳に登る記）

野営を撤して、濡れそうなものは油紙で包み、岩伝いに北を向いて、大籠山おおかごやまと後で名をつけた一峰に達した、三等三角測量標が立っている、霧が吹雨しぶきを浴びせかけて、顔向けも出来なかったが、白峰山脈で、初めての三角標に触れたのだから、ちよつと去りにくい気がした。

それから北西に向つて、一つ支峰を越え、鉢形に窪んだところがあつて、白山^{はくさんいちげ}一華の白と、信濃^{しなの}金梅^{きんばい}の黄とが、多く咲いている、チングルマの小さい白花、赤紫の女宝^{にょほう}千鳥^{ちどり}などで、小さい御花畑を作っている、霧の切れ目に、白河内岳が眼の前に、ぼんやり現われた、足許は偃^{はいまつ}松^{まつ}の大蛇^{おおう}ねりで、雲は方々の谷から、しきりに立ち登る、太古の雲が、初めて山の肌に触れたのは、この辺からではあるまいか、そうして執念深く、今もなおあの山に、つき纏^{まと}つて、谷の住み家を去らずにいるのではあるまいか：前々夜泊まつた広河内の谷が、乾からびたように見える、その附近の黒い森林は、一寸位ずつ這い上つて来るように、雲の揺^{クレイ}籃^{ドル}のように、水球をすさまじい勢いで吐き出す。

西に向いて、また一峰を超え、やや下つてまた北に向つて上る、霧の中で目標にする山もないから、手に磁石を放さない、何でも北へ向けばいいのだ、北へ、北へと歩む。

ふと東北に地蔵鳳凰二山が見えた、鳳凰山の赭^{あか}つちやけた膚に、蒼黯な偃松が、平ツたくなつて、くツついている、うしろには駒ヶ岳が、蒼醒^{あおぎ}めた顔をして覗^{のぞ}いている、前には白峰本岳から連続するらしい二枚の連壁が、低いながらも遮っている、今通過した大籠山は、駱駝^{らくだ}形をして、三角測量標が、霧の波に冠^{ほばしら}されながらも、その底から頂へと突き抜いて、難破船の檣^{ほばしら}のように出ている、見る見るうちに霧に喰^はみ取られて、半分位持つて行かれてしまつたかと思つたが、また繋ぎ合わされて立っている、西に間^{あい}の岳^{たけ}

（赤石山脈）が立ち、東に富士山が、二筋ばかりの白い雪を放射して、それが泥黒い雲を通過する光線に翳されて、何だか赤く錆びた鉄のように見える、富士山の附近は、御阪山脈や、天守山脈だけを、小島のように残して、氷に鉋かんをかけたような雲が、ボロボロ転がっている、山という山の背景は、灰色で一面に塗り潰されている。

北方白峰の本嶺は、一切霧で秘められている、その一切を秘められた北へ北へと、私たちは見えない手に、グイグイ引つ張られて、否でも応でも行かなければならないのだ。

北西の一峰を躓こえたことを記憶している、そこに何があったかと言えば、白花の石楠花しやくなげがあつただけが答えられる。

乱石で埋まった一峰を越したことも、憶い出される、雪が氷つていたことだけが、眼に^{うか}泛ぶ。

それほど霧で眼界を^{せば}窄められていた、それだけまた神経が鋭く尖っていた、自分たちから一間ばかり、先へ離れて、雷鳥がちよ

こちよこ歩いて行く、こつちで停まれば向うでも停まる、歩けば先へ立つて行く、冥府から出迎いにでも来た悪鳥のように、この鳥の姿が消えるとき、自分たちの運命も^{しゅうえん}終焉を告げるように。

雄大なる白河内岳が、円く眼の前に^{おわがさ}ボーツと立つ、この山を中心として、雲の大^{おわがさ}暈が、幻のように^わ圈を描いてひろがる、日輪の輪廓がひろがつて黄色い葵の花のように、廻転するかと思われた。

風が錐きりのように痛い、白河内岳の麓で、焚火をしていると、おくれがちの人夫も、あとから追いついて来た、その中の一人は、雷鳥を捉えて来た、少しは休んだが、風と霧と冷たいのと痛いので、落ちつく空はない、とにかく気の重い人夫どもを促して、登りかける、実を言うと、どの方面へ向いて、何処を登っているのだか、もう解らない、人夫もみんな初めての途で、茫然ぼんやりしているばかりだ、ともかく眼の前の大山を登った、石片が縦横に抛なげ出されている、しかし石と石とは、漆喰しっくいにでも粘くっつけられたように動かない、いずれも苔がベツたり覆せてある、太古ながらの石の一片は、苔に包まれた古都の断礎でも見るように、続々と繋つながって、爪先を仰ぐばかりに中天に高く斜線を引いている――

もう白河内岳の上にかかっているのだ、この饅頭形の石山は、北アルプスの大天井岳おてんしょうにどこか似ていると思ひながら、喘ぎ喘ぎ登る、霧は大風に連れ、肉を截きり削そぐばかりの冷たさで、ヒューツと音をさせて、耳朵を掠めた、田村氏の帽子は、掠奪ひったくられたように、向うの谷へ抛げ出された、製造場の烟突からでも出そうな、どす黒い綿のような雲が頭から二、三尺の上を呻うなつて飛び交う。花が光を、川は音楽を失った、ソラツ暴雨しけだツ、というときには、眼も口も開けられないほどの大雨が、脳天からかけて、人間を石角に縫いつけた、そうして細引のような太いので、人間を毬まりのようにかがる、片足を擡もたげれば、擡げた弱点から、足を浚さらつて虚空へ舞い上げそうな風が、西から吹きつける、誰だつて血の

気の失せない人はなかった、どこへ遁げようとか、どこが安全だとかいうような余裕が、この際誰にもなかったので、我がちに岳の下の偃松の穴へ——野営としてきわめて不適當ではあったが——一人ずつ飛びこんで、偃松の根許へ這い込んだ、この刹那は、私の頭の中も、暴風雨の荒むよう^{すき}に不安であつた、油紙の天幕を枝と枝との間に低く張つて、四ツ足の人間を、この中に這わせた、寒さに手も凍^こえて、金剛杖さえ持つ力がなかった。

焚火焚火、人々は手足の関節から、血の循環^{めぐり}が一秒一秒止まつたように、意識された、今凍えて行くのだということも解る、早くどうかしろと神経が知らせてくれる、誰の顔を見ても、蠟のように白い、マツチ箱は燐寸^{マツチ}一本さえ、烟を立てることなしに、空^{から}

になったほど、何もかも、ビショ濡れになった。

だが晃平一人はウンと踏ん張った、

心配するなッ、ふんどし犢鼻褌をや焚いたツても、お前方を殺すことじゃあねえぞ。

と、その赤銅色の逞ましい顔を、一行に向けて爛とした目から、電が走ったときは、一行に大丈夫という観念を与えた、彼はなた鉈で杖を裂いた、杖の心しんまで雨は透つていないから、細い粗朶そだが忽ち出来る、いぶ燻してどうかこうか火が点ついた、そうすると白烟が低い天幕の中を、圧されて出る途がないので、地を這いずった、高頭君は息を窒つめられて、ヒヨロヒヨロと仆たおれた、避けようとした私はジリツと焦げ臭く髯ひげを焼かれた、堪たまらなくなつて天幕の外へ

首を出すと、偃松の上は、吹雨しづきの柱が、烟のように白く立っている、また油紙の下へ引ツ込んでしまふ、倉橋君は昨夜睡られなかつたので、よくよく眠かつたと見え、この騒ぎの中にもグツスリ寝込んでゐる、白花の石楠花が、この生体のない人の頬に匂つてゐる。

耳を澄まして、谷間に吹き荒ぶ風すさの声を聞くと、その怖ろしさといつたらない、初めは雷とばかり思つていた、あまり雷にしては間断なく鳴るから、不審に思つて聞くと、「大井川の七日荒れ」だという、その「荒れ」が、今の風雨で初まつたのだという、谷の角から谷の角へと屈折し、反響して、空気の大顫動だいせんどうが初まつたのである、この山はいつ頃出来たのであらう、そうして何百万

年もこうして寂として、いたのであろう、それが十年に一度、五年に一度、人間が入って来ると、谷間の底に潜んでいる風が、鎖を繋がれながらも、それからそれへと哮り狂つて、のた打ち廻り、重い足枷あしかせを引き擦り引き擦り、大叫喚をしているのであろう、油紙の天幕の下は、朽木の体内のように脆くて、このまま人間は、生きながら屍しかばねとなるのではあるまいかと、思われた。

この暴風雨がいつまでつづくか解らぬ、それよりも、差し当りこんなところに、今夜野宿が出来るか、否かが疑問である、思い切つて谷へ下りようか、谷へ下りれば、この旅行の中止を意味することになる、一行は思い悩んで決し兼ねた……何だか筋骨を抜かれたように、氣落がして、私も眼が重くなつた。

高頭君であつたか、誰であつたか、不意に消魂^{けたた}ましく、日本晴れだぞ、痛快痛快と、触れ廻るように叫んだ声におどろかさされて、
刎^はね起ると、雨はいつの間にやら霽^はれ上り、西の方の空が一点の痣^{あざ}をも残さず、拭いて取つたように、透明に奥深く冴えわたつて
いる、鼻ツ先には農^{のうとり}鳥山と間の岳^{あい}（白峰山脈）^{たけ}が、近く立つて
いる、こんな大きな山々が、今まではどこに秘んでいたのだろ
う、天から降つたのかと思うように、出たのである、間の岳は頭
がちよつと出ている。農鳥山の赭^{あか}ツちやけた壁には、白雪がペン
キでも塗つたように、ベツたりと光つて輝いている。

西の方には木曾御嶽が、緩斜の裾を引いて、腰以下を雲の波で
洗わせている、乗鞍岳は、純藍色に冴えかえり、その白銀の筋は、

たつた今落ちたばかりの、新雪でもあるかのように、
をかけた色をして、鮮やかに光っている。
糶つやぐすり薬

槍ヶ岳以北は、見えなかったが、木曾駒ヶ岳は、雪の荒縞を着ながらも、その膚の碧は、透き通るように柔らかだ、恵えな那山もその脈の南に当って、雄大に聳そびえている。

もう「こつちのものだ」という、征服者の思いが、人々の胸に湧く、今までのように、悄しよげ気た顔はどこにもない、油紙は人夫どもに処置させて、先刻遁にげ込んだばかりの、白河内岳の頂上に立つて、四方を見廻した、南の方、直ぐ傍近く間の岳（赤石山脈）と、悪沢わるさわ岳が峻けわしく聳えて、赤石山がその背後から、顔を出している——ここから見ると、悪沢岳の方が、近いだけに、赤石山

より高くはないかと思われた、甲府平原は、釜無笛吹二川の合流するところまでよく見える、直ぐ脚下には、岩壁多くの針葉樹を帯びて、山の「ツル」（脈）が、古生層岩山の特色を見せて、低く幾筋も放射している、脈と脈との間には、谷川が幾筋となく流れている、手近いのが広河内、一と山越えてその先のが荒川、最も遠いのが能呂川に当るのである、鮎あゆさし差峠の頭もちよつと見えた。

峰から峰の偃松は、暴風雨のあとの海原のように風ないで、けろりと静まりかえっている、谷底の風の呻しんぎん吟は、山の上が静肅になるだけ、それだけ、一層凄まじく高く響すさいて来る。

汽船・電燈（農鳥山に登る記）

白河内岳から西北へと向いて、小さな峰の塊を、二つばかり越えた、西の方面、木曾山脈が、手に取るように近く見える、三ツ目の峰の下、窪んだところに、残雪が半ば氷つていた、岩高蘭^{らん}や岩梅がその界限^{かいがい}に多い、踏む足がふつくりと、今の雨でジワジワ柔い草の床に吸い取られる、この辺から眼の前の農鳥山を仰ぐと、残雪が白い襷^{たすき}をかけて綾を取っている、荒川の峡谷を脚の下に瞰^みながら偃^{はいまつ}松の石原を行く、人夫^{おく}たちは遙に後れて、私たち四人が先鋒になつて登る。

農鳥山は大約^{おおよそ}三峰に岐^{わか}れているようだ、手近を私たちは――

後の話だが——仮に みなみのうとり 南農鳥と名づけた、雪が二塊ばかり、胸に光っている、近づくほど、雪の幅が成長して大きくなる、雪の側はいわゆる御花畑で、四ツ葉塩釜、白山一華、小岩鏡などが多い。

この大残雪を踏んで、南農鳥の傾斜を登ること半ば頃から、大なる富士山は、裾野から沙を盛り上げたように高く、雪が粉を吹いたように細い筋を入れている、その下に山中湖、それから河口湖が半分喰い取られたようになって、山蔭の本栖湖もとすの一部と、離れ離れに静かな水を伏せている、函根、御阪、早川連嶺などが、今の雨ですつきりと洗われて、鮮やかな緑りよくてん色をしている、愛鷹あしたかを超えて伊豆半島の天城山が、根のない霞のように、ホン

ノリと浮いて、それよりも嬉しかったのは、駿河湾に黒煙をかすかに一筋二筋残して走っている汽船！

きばなしやくなげ
黄花岗楠花が、岩角の間に小さくしがみついて咲いている、

その間を踏んで、登れば、千枚沢岳と悪沢岳の間に、赤石山が吊^りがね鐘を伏せたように円く立っている、支脈伝いに背面を見た時には、壮大だと思った白河内岳も、ここから見ると、可愛そうなほど、低くなって、下に踞^{うず}くまってしまった。

南農鳥の上に出た、足の下から大障壁をめぐらして、近く農鳥山の三角測量標を見たときは嬉しかった、しかし登り著くと南農鳥の最高点は、まだここではなく、五、六町も先にあることが解った、これから截^きつ立った、ギザギザ尖った石が、堤防のように

自然に築き上げられているところを伝わるのだ、偃松と、黄花石楠花の間を抜き足をして、やっと南農鳥山の二等三角測量標の下に來た、おそらく參謀本部陸地測量部員が、野營をした跡ではあるまいかと思われる、ちよつとした平地へ出た。

ここから見ると、石の劍の大嶺が、半円形にえぐられて、蜿蜒えんえんとして我が日本南アルプスの大王、北岳きただけに肉迫している、

その北岳は、大岩塊が三個ばかりくつついて、その中の二塊は、楕円形をしているが、一塊は恐ろしく尖とがっている、そうして四辺あたりに山もないように、この全体が折烏帽子形に切ツ立おりえぼしつて、壁下からは低い支脈が、東の谷の方へと走っている、能呂川のろがあの下から出るのだと、追及して來た獵師が、そう言ったが、實際私たちが

は、川などはどうでもよかった。

もう山という山が、みんな顔を出して来た、地藏岳鳳凰山を隔てて、八ヶ岳の火山^{かざん}彙^いが見える、上野^{こうずけ}下野^{しもつけ}の連山は、雲を溶かして、そのまま刷毛^{はけ}で塗ったのではないかとおもうような、紺青色をして、その中にも赤城山と、榛名山が、地藏岳と駒ヶ岳の間に、小さく潜んでいた、その最右端に日光連山、左の方に越後の連山がぼんやりとしていて、先刻^{さつき}吹き寄せられた雲の名残が知らん、氷のようなのが、幾片となく、その辺の頭をふわりと漂っている、午^{ひる}を過ぎたが、濃い透明の空は、硝子^{ガラス}で張り詰めたようだ、黄色の日光が、黄花石楠花を蒸して、甘酸^びっぱいような、鼻^{しんけい}神経をそそるような匂いとも色ともつかないのが、眼から鼻へ

と抜ける、頭がブーツとする、これでも踏む土の一部分だろうかと思うようだ、残雪は幾筋となく、壁間を放射して、緑の森林の中へ髪の毛を分けるように、筋目をつけて落ちている、ただ北アルプスの大山脈は、雲に閉じられてしまつて、いつまで経つても出て来そうにもない。

金剛杖が石にカチリと当る、金属性の微かな短い音がしてコロコロと絶壁の下に転げ落ちる、どこを見ても絶壁！ 墜石！

三角測量標の直下には、誰かが前に土を均ならした痕のある、野宮地には眺あつちえ向きな、三間位な平地が出来ている、黄花石楠花、小岩鏡、チングルマ、岩梅などが、疎らに生えている、位置は東を向いて、富士山と対している、南へ向いた断崖には、数条の残

雪があるから、溶かして水を獲ることが出来る、時間は猶^{まだ}早いが、これからまた峻しい山稜つづきで、適当な野営地が見つからぬかも知れないから、今夜はここで寝ることにした。

例の天幕^{テント}作りに取りかかる、古生層地は白峰までつづき、鳳凰地蔵一脈の間で、深谷にフツリと切れているのが、よく見える、人夫たちは雷鳥三羽を捕獲した、みんなして二羽を醤油飯に、一羽を焼いて喰った。

霧がまた少し来た、夜になると、甲府市の電燈が黄いろの珠のように、混沌の底から、ボーツと見えた、先刻の汽船といい、この電燈といい、人間に遇わずに、山から山を伝わって、野獣のよきな生活をつづけていた人々の胸をおどらせた。

夜も深くなつた、焚火がとろとろと消えかかったとき、風が吹いて天幕の油紙が巻くられた、その隙間から潜り込んだ風で、焰がパツと燃え上つて光ったときは、寐込んだ油断に身体に火がついたかと思つて、一同夢うつつに駭いて立ち上つた、霧がいつの間にか深くなつていた、油紙は雨に遇つたように湿めつてゐる、冷やりと手に触れたので眼が醒める。

山の肌（間の岳の雪田に到る）

朝起きて見ると、霧がまだ深い、西の方がまだしも霽れていて、うすくはあるが、明る味がさす、東天の山には、霧が立て罩めて、

一行はこの方面に盲目になった、日は霧の中をいつの間にか昇っている、冷たい白い月のように、ぼんやりとして、錫色すずの円い輪が、空の中ほどを彷徨さまよっている、輪の周囲まわりは、ただ混沌として一点の光輝も放たない、霧の底には、平原がある、平原の面は靱プレーンが割れたようになって、銀白の川が、閃めいている、甲府平原は、深い水の中の藻のようにかすんで、蒼く揺めゆらいているばかりだ。

この連日、峰から峰を伝わっているので、水がないから、顔も洗われない、焚火で髭ひげを焼いたり、その焚火の煤煙や、偃松やにの脂で、手も頬も黒くなったり、誰を見ても、化かされたような顔をしている、谷へ下りたい、早く谷へ下りて、自由に奔放する水音が聞えたら、まあどんなに愉快だろう——谷川の流れる末に、巢

くう人里などは、考えるさえ、まだ遠いのである。

二等三角点に添って、西へと向き、見上げるような、岩の障壁を攀^よじると、急に屏風が失くなったようになって、北の方から、待ち構えていた冷たい風が吹きつけて来る、強い風ではないけれど、遠くは北の方、飛驒山脈や、近くは西の方木曾山脈の山々の雪や氷の砥^{といし}石に、風の齒は砥^とがれて、鋭くなり、冷たさがいや増して、霧を追いまくり、かつ追いかけて、我らの頬に噛みつくのである、我らは吹き込む風を中心になったようで、その冷たさと、痛さにと慄^{ふる}えながらも、山稜^{リッジ}を伝わって行く。岩は鋼鉄のように硬くなりながらも、イワベンケイ、ミヤマダイコンソウ、ムカゴトラノオなど、黄紫のやさしい花を、点々とその窪^{うろ}洞に填^うめなが

ら、ギザギザに尖っている輪廓を、無数に空に投げ掛けている。

西へ西へと、伝わって、一山超えようと、また一山が、鋭い鑿^{のみ}で

穿^くりぬいたように、大曲りに蜿^うねった山稜^{リッジ}を、連鎖にして、その

果に突立っている、仰ぐと、西の天は雲が三万尺も高く、堆^{うずたか}くな

って、その隙間には湖水のように澄徹した碧空が、一筋横に入っ

ている、中農鳥とおぼしき一峰を超えようと、また一峰がある、日

が昇るに従って、雲や霧は、岩と空の結び目から、次第に離れて

消えて行く、葉を一杯に荷った楡^{にれ}の樹のような積雲は、方々が頽^{くず}

れて、谷底へと揺落してしまう、そうしてその分身が、水陸両棲

の爬行動物のように、岩を蜿蜒^{はこう}ねり、谷に下って、見えなくなる。

空は高くなって、四方は壮大な円^{アムフィセアタア}形劇場のように開展する

……出た……出た……木曾御嶽は、腰から上、全容を現わした、木曾駒ヶ岳も近くに立ち上った、方々から頭を白く削った稜錐^{ピラミッド}状の山々が、波のように寄せて来た。

脚下の谷へ追ひ落された水蒸気の団々は、反曲の度を高めて、背を山に冷やさせ、顔を日光に向けて、ふわりと立って飛ぶ、それが長く繋が^{つな}がって、日を截^たち切ったかと思うとき、異常な光がチラリと岩角に落ちた、ふと見上げると、円い虹のようなものが、虚空の中に二輪も、三輪も結ばれた、その輪の中に、首を貫ぬいて五、六丈もあろうかと思うような、黒い巨人が、ヌーツと立っている、富士登りの道者のいう、三尊の阿弥陀の来迎はこれだ、
 いっすんぼうし
 侏 儒 のような人間が、天空に映像されたときに、このよう

な巨人となつたのだ、我らが手を挙げると、向うでも挙げる、金剛杖を横よこたて縦に振り廻わすと、空の中でも十字架を切る。暁を思わせるうす紅色で、雨氣を含んだ虚空に、浸み透るように、暈ぼかして描かれた自分たちの印画は、この大なる空間を跨またいで、谷間へと消え落ちた。

この山の上で、朝から夕立に遇つては堪まらないと、多年山登りの経験から氣がついて、呆れ顔の導者を促して路を急ぐ、岩角を上ったり、下ったり、偃松や黄花岗楠花の間を転がるようにして走つたが、その間に幻影は消え消えながら、三度出た、しかし心配ほどもなく、霧は奇麗きれに拭かれて、雨にはならなかった。

あい だけ間の岳は大断崖を隔てて北に聳えている、北岳はここからは見

えない、峻急な山頂の岩壁を峰伝いに北に向けて直下する。間の岳はもう眼の前に立っている、山の空氣が稀薄で透明になっているから、それが近いように見えていて、歩くに遠いのが解る。

雪で 釉つやぐすり 葉をかけたように光る遠くの山々は、桔梗ききよう色に冴さ

え渡った空の下で、互いにその何百万年来の、荒すざんだ顔を見合せた、今朝になつて始めて見た顔だ、或るものは牛乳の皮のように、凝こった雪を被かっている、或るものは細長い雪の紐ひもで、腹の中を結えている、そうして尖銳の岩を齒のように黒く露わして、ニツとうす氣味悪く笑っている。

目的は間の岳にある、残んの雪は、足許の岩壁に白い斑ふちを入れている、偃松はその間に寸青を点じている、東天の富士山を始め

て分明に見ながら、岩や松を踏み越えて、下りると、誰が寝泊したのか、野營地の跡が、二カ所あった、石を畳み上げて、竈かまどが拵かまどえてあるので、それと知れたのだ、偃松たきぎの薪が、半分焦げて、二、三本転がっている。

尾根を伝わって、東に富士山、西に木曾の御嶽を見ながら行くと、また野營地があつた、そこはちよつとした草原になっていた、雪解の水で湿しめつているところへ、信濃金梅しなのきんばいの、黄色な花の大輪が、春の野に見る蒲公英たんぽぽのように咲いている、アルプスの高山植物を、代表しているところから、アルプスの旅客が、必ず土産に持ちかえるものにしてあるエーデルワイス（深山薄雪草みやまうすゆきそう）は銀白にこげの柔毛むらを簇むらがらせて、同族の高根薄雪草たかねうすゆきそうや、または赤紫色の

濃い芹葉塩釜（せりばしおがま）、四葉塩釜（よつばしおがま）などと交つて、乾燥した礫（こいし）だらけの窪地（くぼち）に美しい色彩を流している。

振り返れば、間の岳（赤石山脈）や、悪沢岳の間から、赤石山が見える、そうして千枚沢の一支脈は、兀々（ごつごつ）した石の翼をひろげて、自分たちの一行を、遥かに包もうとしている。

東へ方向を取つて、また北へと折れる、右にも左にも、雪田がある、ここから近く見た間の岳は、破れた石を以て、肉としている、おそらくその石を悉く除けば、間の岳は零（ぜろ）になるであろう、その石だ、老人の皺のように山の膚に筋を漲（みなぎ）らせているのも、古衣（ひだ）の襞（ひだ）のように、スレスレに切れたり、ボロボロに崩れたりしてゐるのも、この石だ、それを針線（はりがね）のように、偃松が幾箇所も縫

っている。

急峻な登りを行く、雲は赤石山を包み隠して、西南にその連嶺の西河内岳の一角を現わした、さすがに富士山のみは、深くまつわる山を踏み踰えて、ひとり高く半天に立っている。

石の急壁を登りかけっていると、雷鳥が一羽、ちよこちよことを歩いて、晃平が、狙いをつけて一発放したが、禽は横に逸れて、截られた羽が、動揺した空氣に白く舞った、一行手取りにするつもりで、暫く追いかけて見たが、掌中の物にはならなかった。

疲労の足を引き擦すつて、石壁の上に登りついたとき、眼は先ず晶々粲々さんさんとして、碧空に輝きわたる大雪田、海拔三千百八十九

米^{メートル}突の高頂から放射して、細胞のような小粒の雪が、半ば結晶し、半ば融けて、大気を含んだ、透明の泡が、岩の影に紫色を翳^{かざ}しているのに、眩^{まば}ゆくなるばかりに駭^{おどろ}いた、南方八月の雪！ 白峰をして白からしめた雪！ 我ら一行の手は、初めてこの秘められたる、白い肌に触れたのである。

羚羊・長之助草（北岳の絶巔に登る記）

それから尾根伝いに、間の岳の絶頂まで這い上り、三等三角測量標の下に立った、北西に駒ヶ岳（甲斐）の白い頭が、眼前の鋭い三稜形をしている北岳に、挟みつけられて見える、霧が来て散

った。

この附近は偃松はいまつの原でなければ、暗礁のような岩角が立っていて、高山植物が点じている、なお北岳を見ていると、東の谷、西の谷、北の谷から霧が吹いて来て、その裾は深谷の方に布しきながら、頂上を匝めぐって、渦を巻いている。西北の仙丈岳を前衛として、駒ヶ岳、鋸岳、木曾駒山脈の切れ間に谷が多いので、このように水蒸気も多く、そうしてこの山を目がけて、吹きつけるのである。

大雪田の石の峰を超えて、三角点の下に来た、木曾山脈を西に控えて、その間の高原を、天竜川が白く流れ、仙丈岳は溪谷を隔てて、その頂上の、噴火口と擬まがいそうな欠けたところが、大屋根

の破風はふのように聳そびえて、霧を吐く窓になっている。駒ヶ岳の白い頭は、白崩しろくずれ山の名を空しくせず、白く禿はげて光っている。

間の岳の峰から、北岳まで尾根が繋つながっていることは、ここで初めて確かめられた、我が三角測量標の下には、窪地があつて、そこには雪田が白く塊かたまりまっている、一丁ほども歩いたかと思うと、また雪田がある、築土ついでの堀の蔭に、消え残った春の雪のようだが、分量は遥かに多い。

石の壁は南方から連なつて、人の歩く路を窄せまめている、もうこの辺からは、雪田が幾筋となく谷へと繋がっている、高頭君の説明するところによると、日本北アルプス中の白馬岳の雪とは、比べものにならないが、十月頃の白馬岳なら、この位なものである。

うか、ということである、一体が暖かい南アルプスに、このように雪が多いのは、未だ山上では、春であるからであらう。

間の岳から北岳までは、北へ北へと、駿河甲斐の国境を、岩石の障壁が頽れなだをうって、肩下りに走っている、その峰は皆剣のように尖れる岩石である、麻の草鞋わらじが、ゴリゴリと、その切ツ先に触れて、一本一本麻の糸が引き截られるのが、眼に見るようで、静しずかに歩くさえ、砂でも噛み当てたように、ガリガリ音がする、あまり峻けわしいから、迂回しようとして、足を踏み込すべらすと、石の谿たにが若葉を敲たたく谷風でも起ったように、バサバサと鳴り出して、大きい石や小さい石が、ひた押しに流れて、谷底へと墜落するのもある、途中で石と石と抱き合って、停まってしまうのもある、

その石の壁の頂には、偃松が多く、高山植物の中にも、ミヤマオ
 ダマキがうす紫の花を簇むらして、岩角に立っているのが、色彩が鮮
 やかで、こんな寒い雪や氷の、礫こうかくな土地も、深碧の空と対映
 して、熱帶トロピカル的に見えた。

峰伝いに下って、いよいよ北岳の直下まで来ると、雪田が二ツ
 ほどある、長さは二十町もあろう、その雪田の谷底に接触する尖
 端から、雪が融けて水になって、流れているものもある、この雪田
 は白馬岳のに、やや匹敵することが出来るが、厚味がそれほどな
 いと、高頭氏は言った、それでもこんな大残雪があつて見ると、
 日本北アルプスのみ、雪の自慢をさせて置けないと追加した。

ふと後から荷をしよって来た人足どもの、噪さわぐ声がする、東の

峽間に、一頭の^{かもしか}羚羊を見つけ出したのだ、なるほど一頭いるわいと気が注^つくころ、中村宗義は銃を抱えて、岩蔭を岩蔭をと身を平ツたく伝わって、谷側まで下りた、円く肥えた羚羊は、キョトンとした顔をして考えている、その短い角が碧空に動かずに、ションと立っている、晃平の采配で、人夫一同は石を上から転がす、シツシツと叫ぶものがある、ホーイ、ホーイ、ホーイと怒^ど鳴る声^ながする、羚羊は石の転がり方を冷たく見て、一、二尺^{すさ}ずつ退^ひりながら、大石の側へ、寄って来る、そこには宗義が先刻から、銃を取り直して待っている、しかし火蓋の切りようが、狙った壺より少し早過ぎたために、羚羊はびっくりしながらも、驚くべき速力で、向うの山へと駈け上った、そうして偃松の傾斜の中へ入って、

岩を楯にまたキョトンとして、こつちを見ている、角は木の枝のよう、体は岩のようにぴったりと静まる、宗義は銃を負つて、岩から岩を殆んど四足の速さで、飛びながら追つかけたが、^{つい}に遁がしてしまった、もつとも羚羊は跛足を引いていたから、たしかに銃丸が、^{たま}足へ当つたろうとは後で言っていたが。

ここから仰いだ白峰の北岳は、峻急に聳えて、肩幅も、おもしろい外、頂上は幾多のギザギザがありながら、大体において平ツたく切截したようになって、間の岳つづきの尾根から、^{つま}抓み上げられたように、北方の天に^こ捏ねられている、まるで麦酒の^{ビール}瓶を押し立てたようだと、高頭君は半ば恐怖を抱いて言つた、その壮容は、殉教者や迷信者を作つて、引き寄せるだけの価値があつた、

もう日は真ッ直ぐに照りつけるようになって、黄色の烈しい光線が、眼をチラチラさせる、未だ午^{ひるまえ}前であつたが、これからいよいよ北岳登りになるのだから、一行は高山植物の草原に足を投げ出して、塩のない、皮の固い結飯^{むすび}を喰い初めた、福神漬^{さい}の菜に、茶代りの雪を噛んだが、喉^{のど}がヒリつくので、米の味も何もなかった。それでも東に甲府平原と、それを隔てた富士山、西に伊那平を踏まえている木曾駒山脈、北の仙丈岳と駒ヶ岳、近くに北岳を仰いで、昼飯を済ました心持は、悪くはなかった。

雪田に沿いて、北岳に向う、先に尖った筋と見たものは、皆一丈もあろうという岩石の重畳で、五つか六つ石が堆^{うずた}かくなっているように見えたのは、岩石で組んだ立派な峰^{ピーク}であつた、その中で

も、巨岩が垂直線に、鼻ツ先に立ちふさがつているところは、身を平つたく、岩と岩の間を潜つたり、這^はつたりした、およそ間の岳から北岳の峰までの、石の草原には、深山^{みやまうすゆきそう}薄雪草、深山金梅^い、トウヤク竜胆^{りんどう}、岩梅^{いわうめ}、姫鋏形^{ひめくわがた}、苔桃^{こけもも}などが多いが、その中で、誰の目にもつくのは、長之助草である、この偃^{えんち}地性の小灌木は、茎の粗い皮を、岩石に擦りつけるようにしている、櫨^{かしわ}に似て、小さい、鈍い、鋸の歯のように縁を刻んだ葉を、眼醒^{めざ}めるように鮮やかな緑に色づけて、その裏面にはフランネルのような白い毛が、おもての緑と対照するために、密やかに布^しいている、恰^{ちようど}度一枚の葉で、おもては深淵の空を映し、裏は万年雪^{かたど}を象つたようである、卵形の白い花が八弁、一寸位の小さい花梗の頭に、

同じく八個の萼がくを台にして、安住している、同じ日本アルプスでも、他所の長之助草に比べて、花でも葉でも、一と際小さい方であるが、それでも殆んど草原を埋めるばかりに群つて、白山はくさんいち一げ華や、チングルマなどと交つて、岩穴や山稜リッジの破れ目に、咲いている、皺しわのあるところに白い花がある、襜ひだの折れたところに白い花がある、溝の穿うがたれたところに白い花がある、白い花が悉くことごと長之助草だとは言わないが、白い花の中に、この花を見ないということはないほどである、大籠山の裏白金梅と、間の岳北岳間の長之助草とは、我らの一行によつて確められた、この高山植物の最大産地——今まで知られているところでは——であつた。

倉橋君と私と一緒になつて、石の峰を絶頂まで辿りついたところ

は、正午を少しばかり過ぎた、高頭君以下も、やがてつづいて来た、絶頂は大別すると、三つに岐^{わか}れていて、偃松が少しばかり生えている、初めのは四角張った石を畳み上げてある、中には三角測量標が立っている、高く抜き出る北岳の頂から、更に自分だけ高く抜いたこの三角点は、日本南アルプスの中で、縋^{すが}り得べき土地の垂直的突端である、それから上は絶対無限の空ばかりだ、三角標の基脚には、きばなしやくなげ黄花石楠花、チングルマ、アオノツガサクラ、浦島ツツジ、四葉シオガマ、白山一華、偃松などが西の障壁へと、斜めに飛び飛びに漂っている。

小さい石祠がある、屋根には南無妙法蓮華經四千部と読まれた、だいにちにやらい大日如来と書いた木札が建ててある、私たちの一行より、二

十日も前に登山した土地測量技師や、昨年登山した東京の人たち、山麓^{あしやす}蘆安村でよく聞く名の森本某、名取某の名刺が散らばっている。

外にも壊れかかった石祠がある、中には神体代りの小鉄板が、錆びて腐蝕しながらも、奉納白根大日如来寛政七年乙卯六月と読まれた、白峰赤石両山脈の頂で、山の荒神たちと離れられない関係があるらしい、鉄の槍身が、赤錆^{ささ}びになつて仆^{たお}れていた。

山頂の眺めは、こうしている間にも、絶えず変っている、仙丈岳の頂上は、雲に包まれてしまった、赤石山脈は間の岳だけを残して、千枚沢岳と悪沢岳とが、消え失せた、脚の下は天竜川だけが認められて、木曾山脈は、紺^{ほうえ}の法衣を着た坊主が行列しながら、

とぼり

帳の中へ一人ずつ包まれるように、見えなくなった、おおかんば大樺谷

の左には、大樺池が森林の底に小さく、穴のように見える、末の梢と頭の枝とが、緑に濃淡の調子をつけて、森然として沈黙している。

測量標の直ぐ下は、野宿に適当な広い平地があつて、それから凄まじいほど、垂直の断崖を作なしている、その下が雪田で、雪解の水は大樺の谷、それから小樺の谷へと、落ちているらしいが、そこまでは解らない。

ともかく北岳というところは、北は駒ヶ岳、北西は仙丈岳、西は木曾山脈、南が間の岳、農鳥、北東が地藏岳鳳凰山などと、高度我に下りながらも、ほぼ等しい大山岳圏にいじょう圍繞せられている

から、北アルプスの高山で見るような、広々とした眺望は獲^えられない。

この白峰山脈縦断旅行も、これでおしまいになるのかと思うと、嬉しいような、気拔けがしたような、勝利の悲哀といったような、情^{なさけ}ない心持が身に沁み沁みと味われて来る。

信濃金梅・木賊（大樺谷に下る記）

北岳三峰中の最北端まで来ると、石で囲^{ほこ}った木の祠^{ほこら}があつて、甲斐が根神社と読まれた、そこから何百米^{メートル}突か低くなつて、尾根の最北端に駱駝^{らくだ}の瘤^{こぶ}のような峰が、三個ほどある、これを私は

飯に、三峰岳と名をつけた、この岳から谷が切れて、北に仙丈岳
 が聳えている、尾根伝いに北の方、甲斐駒を隔てて八ヶ岳と、そ
 の天鷲絨ビロードのような大裾野を見た、下りがけに小さな雪田が、二ツ
 ばかりあつた、人々は雪を爪でガリガリ掻きながら、うまがつて
 喰べた、ツガサクラや、黄花岗楠花の間を伝わって、三峰岳の方
 に向いながら、途中からはいまつ偃松を横切つて、大樺谷へと下りた、
 偃松が尽きると、春の低原地に見られるような、生々しい緑の草
 葉が、陰湿の土を包んで、その傾斜が森林の中まで落ちてゐる、
 草ばかりではない、小さい切石や、角石が隠れていて、かかと踵でも足
 の指でも噛まれて、傷だらけになる、信濃しなのきんばい金梅の花は、黄色な
 珠をなら駢べて、絶頂から裾までを埋めた急斜の、大黃原を作つてい

る、稀に女宝千鳥や、黒百合も交っているが、このくらい信濃金梅の盛さかんに団だん簇そうしたところは、外の高山では、見たことがない。

白樺の痩せた稚い樹が出て来て、その中から山桜の花が、雪のように咲いている、四月の色は北岳の北の尾根から、信濃金梅の傾斜を伝わって、この森林にまで、流れ込んでいる。

次第に喬木の森林に入った、白く光る朽木は、悪草の臭いや、饅すえたような地衣の匂いの中に立ち腐れになっている、うっかり手が触れると、海鼠なまこの肌のような滑らかで、悚然ぞっとさせる、毒どくぶ蛇とが、人々の肩から上を、空気のように離れずにめぐっている、誰も螫さされない人はない、大おお樺池かんばいけを直ぐ眼の下に見て、ひた下おりに下る。

森がちよつと途切れて、また草原になる、雪の塊が方々に消え残っている、大樺池は、この緑の草原の中で、針葉樹や白樺の稚^わ樹に、三方を囲まれ、一方は原に向いている、水はうす汚なくて、飲もうという望みは引ッ込んだが、草影、樹影、花影が池に入つて、長い濃い睫毛^{まつげ}が、黒い眼の縁^{ふち}に蓋をしている、緑晶のような液体の上を、水虫が這っている、それが原の中の「眼」から、転ぶように動く涙のようだ。鳳凰山地蔵岳の大花崗岩山は、その峻^{けわ}しい荒くれた膚を、深谷の空氣に、うす紫に染めている。

それからまた針葉樹林を駈け下りる、水の音がするすると、樹の間を分けて上つて来るようだ、水！ 水！ 連日味わなかった水！ 一同は狂氣のように躍り上つて、悦んだ、そうして小さい

谷川へ下りたときには、敷石の水成岩の上に、腹這いになって、飲む、嗽ぐ、^{すす}洗う、もう浸かるばかりにして、やつと満腹した。

それから大樺谷を右左に、石伝いに徒渉すると、窮溪が開けて、林道となった、材木の新しく伐り倒された痕を見つけて、もう人がいると思った、羊歯^{しだ}や木賊^{とくさ}の多く生えている谷沿いの、湿地を下りてから、路も立派についている、能呂川の縁の、広河原というところへ出た、『甲斐国志』能呂川の条に「河側に木賊多し、残篇風土記に、巨摩郡西隈本木賊とあり、意^{おも}ふにこの川の古名なるべし」、今も木賊が、この辺到るところに自生している。

材木小舎があつて、男女七、八人、精々と労作をしている、木は唐檜^{とうひ}が多く、飯櫃^{めしびつ}の材料に、挽^ひき板に製している、晃平を使

いに立てて、一泊を頼んで見たが、聞き入れない、一行は急流に架けた木橋を渡つて、能呂川の対岸に出ると、北岳が頭を圧すように、近く空を劃^{かき}つて、頭^{ずぬ}抜けている、「あの山の頂を踏んだ」という誇が、人々の顔にまざまざと読まれた。

十町ばかりも足をひきずつて歩いたが、ここに川縁の広い沙原

——
下^{しもかんば}樺^ばという

——を見つけて、今夜の野營を張ることにし

た、床は褥^{つが}の葉で布^しき敷めた、屋根は例^{いつも}の油紙である、疲れた足

を投げ出して、荷の整理にかかる、今日は殊に岩石の多い傾斜地

を来たので、今までは一日一双か二双位の草鞋^{わらじ}が、平均五双ずつ

を費やした、最も堅固なものにしていた麻の草鞋も、大穴が明い

て、棄てるより外はなかった、繃^{ほうたい}帯、絆^{ばんそうこう}創膏、衣服の修繕の

糸や針、そういうものが、人々の手から手に取り交わされた、谷川の清い水で、鍋や茶碗が充分に洗われた、この日の夕餉ゆうげはうまかった。

夜になって空に星はあつたが、電光が白い柱を、谷の中に投げ
ては、夜営の人々をおどろかした、夜半には、秋雨が音なく注い
だ、川縁に転がっている流材を焚火にして、寒さを凌しのいだ、針葉
樹の切崖で囲んだ、瓶のように窄せまい谷底からは、天も谷川ほどの
細さで流れている。

青空文庫情報

底本：「山岳紀行文集 日本アルプス」岩波文庫、岩波書店

1992（平成4）年7月16日第1刷発行

1994（平成6）年5月16日第5刷発行

底本の親本：「小島烏水全集」大修館書店

1979（昭和54）年9月～1987（昭和62）年9月

入力：大野晋

校正：伊藤時也

2009年8月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

白峰山脈縦断記

小島烏水

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>